

肉親への手紙等に見る人間栗林忠道

高 木 寛

はじめに

国を出てから 幾月ぞ
ともに死ぬ気で この馬と
攻めて進んだ 山や河
とった手綱に 血が通う
昨日陥した トーチカで
今日は仮寝の たかいびき
馬よぐつすり 眠れたか
明日の戦は 手強いぞ

これは、戦争中「露宮の歌」や「曉に祈る」などと共に、多くの人々に広く愛唱された軍歌「愛馬進軍歌」の一節である。戦場で兵士が、共に戦う愛馬に思いを寄せ、やさしくいたわる気持ちを歌ったものだが、軽快で勇壮ななかにも、何となく哀調をおびた歌であり曲である。

馬は戦争中欠かせない生きた兵器として、軍人を乗せる乗馬や荷を積む駄馬、車を引かせる轡馬として尊重され、戦力の一翼をになったのである。

この歌詞は、日中戦争が始まった翌昭和十三年（一九三八）秋にひろく国民から公募し、陸軍省選定として一世を風靡したものだが、この歌の選者をつとめたのが当時陸軍省軍務局馬政課長で、後に硫黄島で玉碎する松代西条出身の栗林忠道である。

東京都内昭島市に義井未亡人（九十五歳）と住む長男太郎氏は、この歌詞について、「とった手綱に血がかようというところは、父が添削加筆した部分です。いかにも文人肌と言われた父らしい表現です」と語っている。

最近松代大本営跡については、世間の注目をあび、多くの人々によってその詳細が報告され、かなりの数の本が書かれているが、栗林大将については、『硫黄島戦記』



写真1 栗林忠道大将の生家(松代町西条穴)

母もとは頭
 脳明晰、いわ
 ゆる良妻賢母
 で、夫が事業
 のため留守が
 ちな家庭を守
 り、使用人を
 使って共に農
 業を営んでい
 た。子供達に
 対しては厳格
 ななかにも慈
 愛をもって育
 てた。忠道は
 晩年母につい

て、「母の厳格な躰が今日の自分をあらしめたものであつて、子供の育つのは母の影響が大である。私も性格的に母の感化が大きかった」とよく妻子に語り聞かせていたという。

忠道が軍人の道に進み、騎兵科の選択をしたのは多分に兄芳馬の感化があったことが見逃せない。学業成績が優秀であった芳馬に、受持教師は進学を勧めたが、母も



図1 栗林忠道大将の生家松代町穴のあたり
 奇しくもノロシ山をへだててすぐ東側に松代大本営跡がある。

を除いてはあまり多く語られていない。

先日たまたま市誌編さん室の資料収集のため松代を訪れた際、栗林大将の生家を訪れ、現在生家を継ぐ栗林直高氏(須坂市旭ヶ丘小学校長)から種々話を聞く機会を得ることができた。そこで伺った話や、生家に残っている

手紙、資料等を基にして、一人の人間として常に家族や部下を思いやり、薩黄島で圧倒的に優勢な火力を持つ数倍の米軍を相手に、最後まで勇戦敢闘し、敗れたりとはいえ、米軍をして終始震駭せしめ、日本陸軍伝統の名を辱しめなかった、我が郷土出身の栗林忠道將軍の人間像の一端を紹介してみたい。

一 エリート將軍を目ざして

栗林忠道は、明治二十四年(一八九一)七月七日、市内松代町西条穴区三〇七八番地に、栗林鶴治郎ともとの間に、長男芳馬に次ぐ次男として誕生した。

穴区は貞道長野(真田線(地藏峠道))の沿線で、北信濃から地藏峠を経て、東信や上州へ通ずる交通路の入口に当たり、豊栄小学校とは貞道をへだてた西側にあり、奇しくも松代大本営地下壕裏さい跡とはノロシ山をへだてたすぐ東側にあたる。

家は戦国時代より真田家閨屋郷の郷士(のち士族)として現在の地に居住した旧家である。鶴治郎は、郷士当時の先祖伝来の資産をもとに、銀行や製糸業に重役として出資したが、いわゆる士族の商法で間もなく失敗、破産のうき目にあつてしまふ。従つて忠道の少年時代は、ぜい沢や我がままの余裕は無かつた。

との意向と本人の考えで進学を断念、農業に専念することとなつた。その後、日露戦争に従軍、騎兵曹長として出征、筆まめで写真好きの彼は、さつそつとした馬上姿をしばしば郷里の父母、弟妹達に送つてきていたのである。

忠道は明治二十九年松代小学校を終えると、西長野上野ヶ丘の長野中学校(現長野高校)に入学した。後に同じく長野中学校から陸軍士官学校に進み、砲兵中尉に任官、陸軍大学校入学準備中大正十一年惜しくも病没(肺結核)した弟の熊尾や友人と、学校近くの西長野に下宿して自炊生活をしながら通学した。

将来を期待され、仲睦まじかつた弟熊尾は、秀才型で特に理教科に優れ剣道の達人でもあつた。最愛の弟を亡くした忠道の落胆悲しみは深く、生涯弟の死を惜しみ通していった。

長中同期(第十一回卒)には、金子繁治海軍中將、一学年上に篠原直衛陸軍少將、神林美治海軍中將、そして四学年下に日中和平に尽力した朝陽出身の今井武夫陸軍少將がいる。この頃から豊かな文才を発揮した忠道は、長野中学校の『校友会誌』(明治四十四年)に、「自炊生活」と題して友人達との気軽な自炊生活の様子を詳細に紹介して興味深い。勉強のあい間に、尺八の練習を

したのもこの頃で、近所の栗林熊平老人から尺八の手ほどきを受け、卒業までには相当の腕前に上達している。

忠道の長中時代の第二志望は、外国回りの報道記者であったという。英語が得意で（後に米国留学時に役立つことになる）、当時の井上英語塾へ進学を希望したが、経済的理由もあって兄芳馬に反対され、受験を断念、東亜同文書院と陸軍士官学校を受験、共に合格したが、長中の教頭と相談した結果、陸士入学に踏み切ったという。

戦前の日本では、農家で優秀な二、三男に開かれた出世コースは、陸士、海兵に進んで将校の道を歩むか、師範学校に入り教師、校長となって教育者の道を選ぶかが相場とされていた。いずれも官費で教育を受けられ、将来を約束されるからであったが、師範のコースは、小学校高等科から進めたが、陸士に入るには、中学校を経由せねばならなかった。したがって、結果的には、将校への道は、かなり裕福な自作農ないし中小地主以上の子弟でないとかなえられなかったのである。

こうして忠道は、大正元年（一九一二）将校養成機関である東京市ヶ谷の陸軍士官学校に入学（二十六期）、陸軍将校へのスタートを切った。

軍人は全くの序列本位の社会で、その序列は陸士の卒業成績によって決まった。同期生の中でトップグループ

忠道が將軍の登竜門である陸軍大学校に入学したのは、大正九年十二月、騎兵中尉二十九歳の時であった。随分勉強したようで頑健な体力にまかせて一日三時間位しか眠らなかったという。一度で難関を突破できたのは、本人の努力は勿論であるが、一番で卒業、エリート將軍のシンボルである恩賜の軍刀を拝受しているのをみても多分に天分があったからであると思われる。陸大在学中は

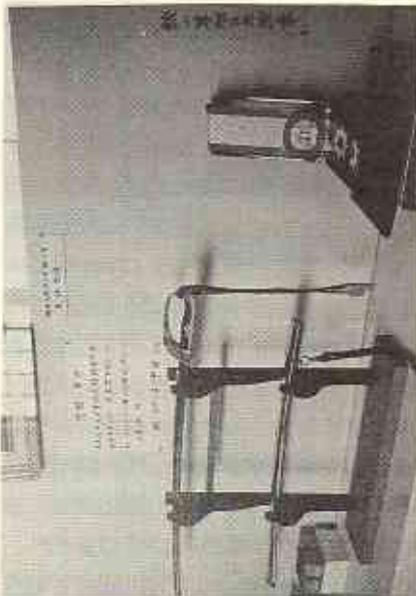


写真3 栗林忠道大將が拝受したた恩賜の軍刀シンボルであった

殊に戦略戦術学に抜群であったと後年家人に語り続けていたという。陸大夏季、冬季の定例休暇には決まって生家に帰省し、両親に元氣な顔を見せて安心させた。夏の日



写真2 第三十一軍司令官陸軍大將栗林忠道

でスタートを切れれば、よほどの大過がない限り、將軍の座まで順送りで進むことができた。

陸士を出た士官候補生は、歩兵、騎兵、砲兵、工兵、航空兵などの各兵科に分かれたが、栗林は兄の影響もあって騎兵科に進んだ。この進路については生涯悔いていたようで、常に家人には、「一軍人になる場合は本流の歩兵を選ぶべき」と口癖に言っていたという。将来騎兵のあるべき姿としてその機械化をどのように考えていたのか、また軍の近代化にとって乗馬騎兵の価値をどのように受けとめていたのだろうか。

中には甥や犬をつれて関屋川に出かけて水泳、夜は部屋に籠り日頃愛用の尺八で追分けを好んで吹いていた。また上京する途中には、温泉が好きでいつも定宿の山の湯の温泉宿で二、三泊し、ここでも宿の亭主等に得意の尺八を吹いて聞かせていたという。

大正十二年関東大震災直後の十一月陸大を卒業すると、三十二歳で兄芳馬の薦めで、同郷更級郡稲里村の旧家同姓の栗林家の義井（十九歳）と結婚、十三年十二月から東京の教育總監部付で昭和三年三月米国に出発するまで新婚生活を送っている。

一 アメリカ留学中の栗林忠道

当時陸大卒の成績優秀者は、陸軍省・参謀本部・教育總監等の中枢機関で幕僚勤務を見習ったあと、アメリカ・イギリス・ロシア・ドイツ等の先進国に、二、三年軍務局所管の駐在員として留学の特権を与えられていた。

忠道も、騎兵第一五連隊中隊長、教育總監部付を経て、昭和三年三月第一回の渡米を命ぜられ、愛用の尺八を持参して单身勇躍して横浜を出帆、大洋丸でハワイ経由サンフランシスコ着でボストンに赴いた。米国騎兵第一師団付で軍事研究のかたわらハーバード大学・オックスフォード大学・ミシガン大学の聴講生として語学と米国史、民

情等を学んだ。

この留学中に、栗林大尉は、日本に残した幼い長男太郎（当時五歳から小学生）宛に数々の絵手紙を送り届けた。これを見ると、栗林大尉のアメリカ留学中の生活の詳細がわかり極めて興味深い。なかでもアメリカの子供達が三輪車を乗り回して遊んでいるところをスケッチ風に画いた絵手紙では、次のように書いている。「お父さんはこうしてアメリカの子供達が遊んでいるところに出会うと必ず立止ってじっとしばらくそれを眺めています。太郎君もこうして元気よく遊んでいるかと思うと……」。

また見本図から切り取った自動車を紹介して、「お父さんは今最新式の四人乗りの自動車を運転しているよ。坊（太郎）がいればいくらでも乗せてやるのになあ。どうだ乗りたいか」などとも書いている。ここには長男太郎への子と思う一人の父親としての情感が込められていて、栗林大尉の人柄が偲ばれる。

このように、アメリカでの大尉は、着任後早速フォードの新車を購入するや、米軍の将校に運転を習って自分で運転し、アメリカ大陸の各地をドライブして回って見聞を広めている。後に硫黄島でも、堀江芳孝参謀に向かい、「若い頃アメリカにいて、自動車を買ってあちこち見て回ったが、アメリカの軍事と工業の繁栄はすばらし

い。デトロイトの自動車工場をみたが、ボタン一つ押すだけで全工程が動く。その実業家が陸軍や海軍の長官になって軍需工場で軍の真づけをやるんだからこっちはたまらない」と、日米国力の差を嘆いている。

三年の留学を終え、いったん帰国したが、翌昭和六年（一九三一）にはカナダ公使館付武官として再度のアメリカ大陸に在任。この二度にわたった約六ヶ年間にわたる海外生活により国力や民情を直接直視、これにより多くの外国人の知己をえ、海外事情にも非常に明るい陸軍有数のアメリカ通であった。そのため、第二次世界大戦の日本の置かれた立場、行動に慎重を期しかつ軽拳を戒めていたのは、同じく海軍でアメリカの国情にくわしく、アメリカ通として太平洋戦争開戦に慎重な態度だったといわれる長岡市出身の山本五十六大将と共通したところがあるのではないかと。奇しくも共に大戦中第一線で壮烈なる戦死をとげている。

このように日本の軍部は、日露戦争後最大の仮想敵国と目されたアメリカに、山本五十六をはじめとして最優秀の青年士官を数多く送りこんで軍事研究等に従事させた。

栗林もその一人で、アメリカの国情をよく理解し、親近感をもっていた軍人であった。しかし、皮肉にも後に

硫黄島においてその米軍相手に死闘を演ずる運命になるうとは思ってもみなかったにちがいない。

忠道は生涯を通じて母思いであった。在京中は母をよび寄せて同居し、アメリカ留学中に出す通信の中には、母の安否を気づかう言葉が必ずあったという。忠道渡米の際にはその都度母と別れを惜しみ、また母も忠道帰省の通知を受けると忠道大好物の数の子を必ず用意して指折り教えてその帰りを待ったという。

三 栗林忠道の妻子への手紙

硫黄島で陣頭指揮をとる栗林中将は、当時義井夫人の生家の更級郡穰里村（長野市穰里町）で農業を営む栗林知美さん宅に隣開して、国民学校初等科四年に通う二女たか子さん（当時十二歳）にとっても誰よりもやさしい一人の父親で、毎月一、二回必ず陣中便りを送ってたか子さんを励ましていた。次はそのなかの一通である。

「たか子ちゃん元気ですか。お父さんも兵隊さんも皆元気で戦っています。敵の空襲も烈しくなり、軍艦も時々攻めよせることもあります。しかし完全な防空壕がありますから安心です。（中略）田舎は寒くなったことでしょう。お父さんの所は、まだ暑く、蚊や蟬がブンブンしています。この間、東京の

お母さんからたか子ちゃんが、全優だとの便りがありました。お父さんも大変嬉しく思います。これからもよく勉強していつでも全優になるようになさいね。それから全優になっても高慢したり油断してはいけません。又身体を丈夫にすることと誰にでも好かれるようにならなくてははいけません。勉強ができるばかりでなく誰にでも親切にいじ悪や皮肉をしないことです。（下略）」

子と思う一人の父親として、我が愛娘に寄せて人間の生きる道を諭すやさしい温情溢れる便りで、読む者の心をひしひしと打つものがある。

また義井夫人宛てにも、「戦地にて良人より」として、昭和十九年七月から九月にかけて空襲の間を縫って往来する連絡機に託され、次のような手紙を書き送っている。

島の将兵〇〇は皆覚悟をきめ、浮ついた笑一つありません。悲憤決死其のものです。私も勿論さうですが、矢張り人間の弱点か、あきらめ切れない点もあります。（中略）殊に又、妻の御前にはまだ余りよい目をさせず、苦勞許りさせ、これから先まこと云ふ処で此の運命になったので、返すがえす残念に思ひます。

私は今はもう生きて居る一日一日が楽しみで、今日あって明日ない命であることを覚悟してゐますが、せめてお前達だけでも未長く幸福に暮らさせたい念願で一杯です。(中略) 私の一身に付てはもう一切気にかけることなく(下略)

空襲は相変わらず毎日あります。その度にこちらの飛行場や陣地がいためつけられるので、あちらこちら見渡す限り草木がなくなり、土地がすっかり掘りくりかへされて惨憺たる光景を呈するに至りました。(中略)

敵が上陸してくる事になれば、愈々アツツやサイパン同様激しい戦闘が起り、晚かれ早かれ生死何れかに運命はきまるのである。かうして手紙が書けるのも後何遍あるか。(中略) ほんとに色々と長い間厄介になりました。厚く礼を申します。

(上略) 私も米国のためこんなところで一生涯の幕を閉ちるのは残念ですが、

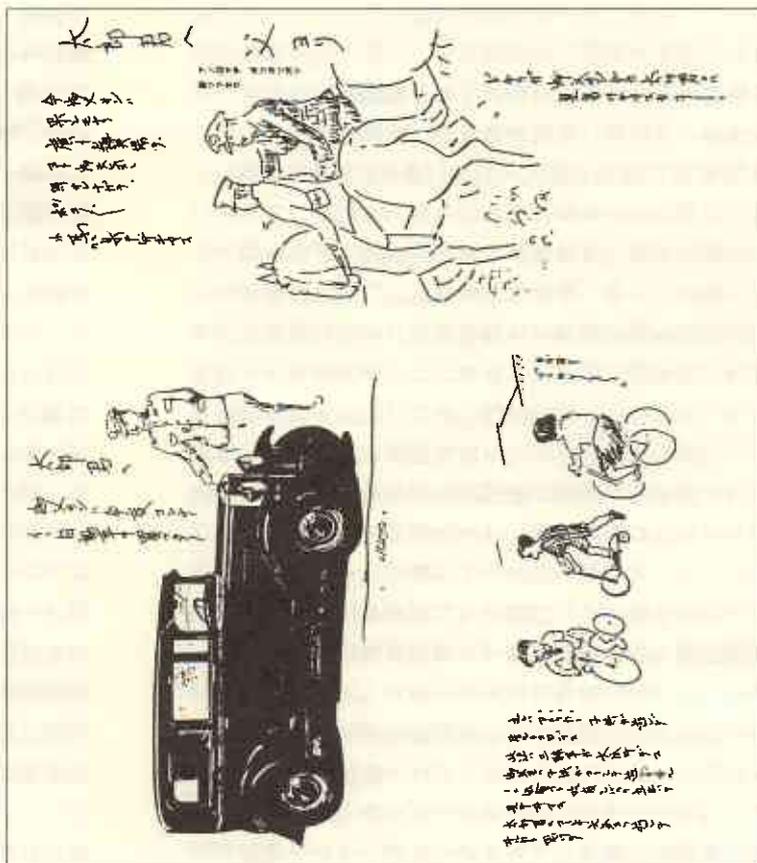


図2 栗林騎兵大尉がアメリカから長男太郎宛に送った絵手紙の一部(昭和3年)

一刻も長くここを守り、東京が少しでも長く空襲を受けまいよう祈つてゐます。

栗林最高指揮官だったからこそ検閲を通つたものと思われのような内容の率直な文面で、一人の人間として妻へのいたわりと人間的な情感に溢れていて、読む者の胸を打つ。

硫黄島には、硫黄ガスが噴き出して湧水がなく(地下層を掘るには好都合であったが)、自然の天水を頼みとせざるを得なかったから、兵士たちの使える水の量は極端に乏しかった。栗林司令官でさえ、洗面には洗面器に少し入れた水で顔の目だけを洗い、その同じ水で副官が洗い、その残った水は便所の手洗い水として使った。そんな毎日の生活だったから、中將は島内の視察の途中、部下の部隊長の一人が、水に手拭いをひたし、そつと顔をぬぐつたのを見て、声を大にして吐りとばした。

この上官として分けへだてしない栗林中將の言動に、島の兵士たちの中將への信望は厚かった。

硫黄島での栗林中將は、いつも島内の巡視には、地下足袋をはき、刀も持たずに細い杖をつき、自動車や馬を使わずもっぱら徒歩で見回っていた。中將得意の乗馬も部下がすすめても、「馬は大切な水を飲むから」とことわり、島のすみからすみまで歩き回つて地理を頭にきざ

み込み、参謀を指揮した。その記憶力と適切な判断と綿密な計画には参謀達はいつも舌を巻いた。

またこの硫黄島の戦場にあつて、栗林中將の温顔に触れ、最高指揮官の心のあたたかさを肌で受けとめていたひとりの海軍予備学生出身の一少尉がいる。硫黄島生き残りの多田美がその人で、その著『海軍学徒兵硫黄島に死す』の中で、中將の砲台巡視の際に、軍隊経験の浅い学徒兵出身のこの砲台長に対し「ご苦勞をかけるがしつかり頼みます」とのあたたかいはげましの言葉を投げかけられ

感激したことを書いて

一見したところ細い口ひげ、色白丸顔、きゃしゃな体軀に見えるが、あふれる闘志は人一倍強く勇猛豪傑で



写真4 硫黄島最前線で参謀と陣頭指揮をとる栗林中將(左から2人目)

いつも部下に「ここは皇土防衛の第一線である。ここで俺は死ぬ」と言明していた。各部隊に対しては、「命令はその日のうちに即刻実行に移せ」と命じ、その意志は一人ひとりの兵隊にすみずみまでゆきわたり、全員が堅固な実行力をもった軍紀厳正な団結兵団になっていた。これがのちに、いたずらに死を急ぐバンザイ突撃をとらせず、全滅するまであくまでも洞穴にこもって島を守り抜き、敵を引きつけて莫大な損害を与える栗林の洞穴戦法が徹底されたものとなっている。大戦中この敵を揚げて叩く戦法を採用して大きな効果をあげたのは、ペリリュー島と硫黄島だけで、この点栗林戦術が大いに評価されるゆえんで、その作戦は、敗れたりとはいえず、戦史に名を残すものとなったのである。

四 硫黄島の死闘と栗林忠道最後の

米軍のサイパン島上陸直前、戦局がいよいよ重大局面を迎えた昭和十九年六月八日、栗林中将は、近衛師団長から、小笠原方面軍最高指揮官として日本本土の一部硫黄島防衛という重要な任務を帯びて空路硫黄島に着任した。

硫黄島は、東京都小笠原村硫黄島で、本州の南千二百キロ、名前のとおり硫黄の噴き出す火山の孤島である。

て頑強に抵抗した。米軍の撃ち込んだ艦砲射撃の数は第二次大戦中の最大数四万発余りに達し、戦闘は文字通り凄烈を極め、米軍により「地獄の島」と戦慄せしめた。なかでも櫻鉢山、玉名山をめぐる戦闘は山容を一変させるすさまじさで、学生時代見た戦後封切のジョンウェイ主演のアメリカ映画「硫黄島の砂」の実録の戦闘場面のすさまじさがいまだに記憶に生々しい。

勇猛果敢に戦って米軍を終始震駭させた栗林兵団も、遂に戦死者続出、弾丸も尽き果て、食糧、特に飲料水に苦しみ、戦闘力は著しく低下、島の北部に追いつめられた。最後まで沉着に戦闘を指揮した栗林中将も遂に三月十六日、次のようないかにも又人肌らしいかなりな長文にわたる悲愴な訣別の電報を発し、終りに辞世の歌三首を添えた。

胆参電第四二七号 三月十六日二七二五発硫黄島
宛参謀総長

戦局遂に最後の関頭に直面せり。十七日夜半を期し、小官自ら陣頭に立ち皇国の必勝と安泰とを祈念しつゝ、全員壮烈なる総攻撃を敢行す。敵来攻以来想像に余る物量的優勢を以て陸海空よりする敵の攻撃に対し克く健闘を続けたるは小職の聊か自ら悦びとする所にして部下将兵の勇戦は真に鬼神をも笑かし

広さは二十一・五平方キロと小さいが、日本本土とサイパン島とのほぼ中間にあって飛行場をかかえた硫黄島は、日米両軍にとって戦略的に最も重要な位置をしめていた。

栗林中将は、いち早く在任の千人ほどの島民を疎開させると、掘っても地下水の出にくい利点（逆に飲用水にとっては欠点）を生かして、地下二〇〜三〇メートルに達する地下壕を言語に絶する難工事の末、十八日にわたって縦横に掘りめぐらし、空前絶後といわれた強固な地下陣地網を構築した。この「栗林洞穴」にこもって敵を迎え撃つ作戦をたて、陸軍約一万五五〇〇、市丸利之助少将率いる海軍約七五〇〇、計二万三〇〇〇の将兵は、日夜猛訓練を重ねて米軍の襲来を待ち受けた。

昭和二十年二月十五日、アメリカ軍最強を誇る第三、第四、第五海兵師団で日本軍の三倍を越える七万五二四四人が、八〇〇〇発におよぶ艦砲射撃と空母五隻の飛行機からの爆撃の掩護を受けながら上陸したが、じっと待ち受けた日本軍の集中砲火に被害が続出（このときすでに死者二四二〇人に達している）したが、圧倒的に優勢な火力でそれをはねかえし遂に上陸、橋頭堡が築かれた。

以後、攻略予定は数倍も狂わせられ約一カ月間にわたり寸土を争う熾烈な戦闘が連日くりひろげられ、洞穴にこもる守備隊は、栗林指揮官を先頭に全員火の玉となっ

むるものあり。然れども執拗なる敵の猛攻に将兵相次で斃れ、ために御期待に反しこの要地を敵手に委ぬるの已むなきに至れるは誠に恐懼に絶えず幾重にも御詫び申上ぐ。（中略）今や弾丸尽き水涸れ戦い残れる者全員愈々最後の敢闘を行わんとするにあたり熟々皇恩の忝さを思い粉骨碎身亦悔ゆる所にあらず。茲に将兵一同と共に謹んで聖壽の萬歳を奉唱しつゝ、茲に永久に御別れ申上ぐ。終りに左記歌作御笑覧に供す。

国のため重きつとめを果し得て

矢弾尽き果て散るぞ悲しき

仇討たて野辺には朽ちじわれは又

七度生れて矛を執らむぞ

醜草の島に憂る其の時の

皇国の行手一途に思ふ

栗林中将

大本営はこの硫黄島からの電文を最後に全員玉砕したと発表した。以後大本営とは通信が杜絶したが、父島で同島派遣参謀堀江芳孝少佐が二十三日までまだ最後の戦闘の様子を受信、同日夕父島に向かつての「父島の皆さんさようなら」と最後の別れの電報を受信している。

栗林中将の戦死の状況は、割腹して自害した、ピスト

ルで自害したという説、あるいは最後の兵力を率いて突撃したという説などに分かれるが、中将与最後まで行動を共にして重傷し、米軍野戦病院に助けられて生還した一兵士(曹長)によれば、三月二十六日未明、大阪山附近で残りの将兵約四百名と共に最後の総攻撃を取行したが、この時すでに中将は左肩に重傷を負い、軍刀右手に杖とし、高石参謀長・中根参謀等生き残りの鞆俵を従え、叱咤指揮中敵機関銃弾のため胸部貫通重傷を負い、そのまま出血多量にて絶命壮烈なる戦死をとげたという。

なお、硫黄島で栗林最高指揮官の下で、運命を共にした郷土松代出身の戦没者も十二名にのぼり、名前は次の通りである。

海軍機関兵長	角 沢 戒 治
海軍上等水兵	岩 崎 智 徳
陸軍兵長	青 木 藤 治 郎
海軍上等整備兵	中 沢 庄 治
海軍機関兵長	飯 田 重 則
海軍上等整備兵	吉 池 正
海軍上等機関兵	鈴 木 勸
陸軍軍曹	栗 林 武 久
海軍機関兵長	坂 口 孝 光
陸軍伍長	中 沢 春 夫

海軍二等兵曹 吉 池 千 孟

海軍上等整備兵 畑 照 雄

この硫黄島の激戦での米軍の出血は甚大で、その数二万四千八百五十七人と記録されており、米軍が攻勢に出て以来、米軍の損失が日本軍のそれを上まわった唯一の戦闘であった。日米両軍とも渾身の力をふりしぼったためか、アメリカ海兵隊員たちの中には、帰国して平静をとりもどしたあと、日本兵に対して敵ながらあっぱれと畏敬の念を抱くようになった者も多いという。また米将スミス中将をして、「統帥の勇、偉大な將軍栗林。かかる智将と巡り合い、戦闘を交えることのできたのは、一生の名誉というべきなり」と言わしめたという。

おわりに

米軍が島に上陸する二カ月半ほど前の昭和十九年十一月二十八日、栗林忠道は、郷里松代西条の生家兄芳馬宛に次のような一通の手紙を寄せている。これが、忠道最後の手紙となった。

(前略)

御無沙汰仕り候。

お手紙有難く拝受仕り候。

皆神山一帯軍事施設の件は、年来の懸案が最近に至

り実行に着手されたものに御座候。敵があつた辺を爆撃する事は万々なかるべしと存じ候。東京附近も空襲の緒に入り目今愈々油断ならざる次第に御座候。小生の任地は眞に国防の最重要地の一事として着任

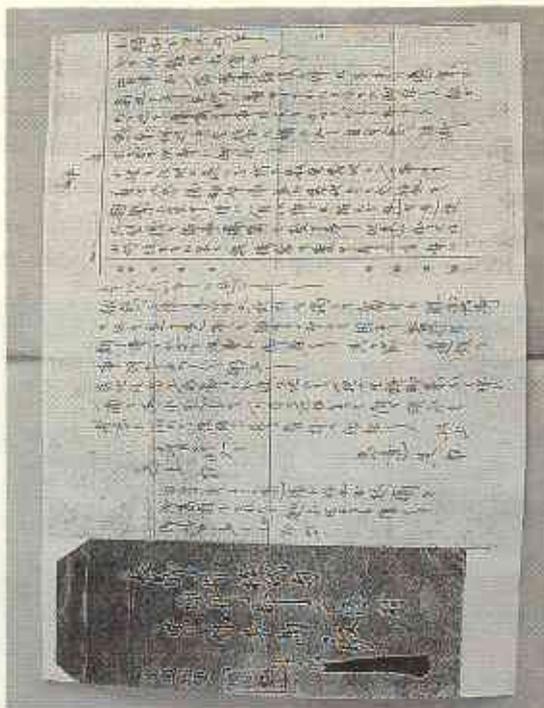


写真5 栗林忠道大將が生家の兄芳馬に宛てた最後の手紙

以来米機動部隊並に基地よりの空襲を頻繁に受け、殊に八月以降は殆んど連日連夜大型機の編隊爆撃を受け居り、地点に依りては山形改まるに至る程惨害を受け居るも幸に今以て無事に過し居り候。

敵愈々上陸して来れば只死力を尽して奮闘し、祖国国防衛の任を全うせん事を期するのみにて固より生還は期し得られざる次第に御座候。其の節は遺族の事何卒よろしく願上候。当地生活上非常に不便の地にて一把の生鮮野菜なく殊に一滴の清水なくして一ヶ月に一辺位ちょっと降る雨水を丹念に溜めて使用し居る有様に御座候。以上。

十一月二十八日

忠道生拜

兄上様

留守宅よりの通信に依れば林橋を御患送下されたる趣小生よりも厚く御礼申上げ候。

長野県松代局 埴科郡西條村 栗林芳馬殿

親展

表には軍事郵便と、検閲責任者藤田と印した検閲済のスタンプが捺してある。

極秘工事ですでに着工していた隣の松代地下壕のことにふれ、米軍上陸が間近に迫り、連日猛爆を受ける島の状況や、食糧不足や天水に頼るしかない生活上の不便さ

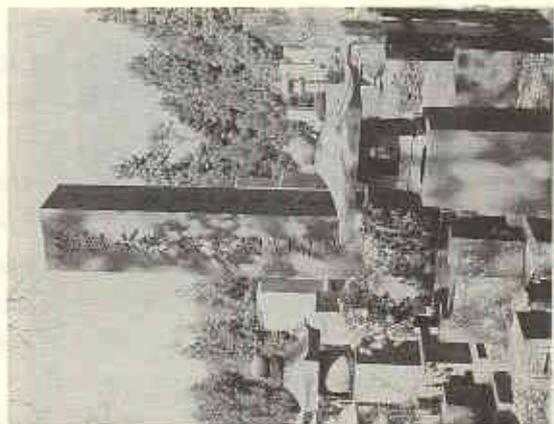


写真6 明徳寺墓地にある陸軍大将栗林忠遺の墓

を伝える中で、死を覚悟し、残された遺族の後事を信頼する足芳馬に託す人間忠遺の気持ちが読む者の心にひしひしと迫る。

硫黄島で武人としての最後を全うした栗林中将（戦死後直に大将に昇進）は、幼い頃より性温厚誠実にして、常に家族や部下に思いを寄せ、慈愛あふれる智性豊かな将軍であった。国のため命を捧げることが崇高な行為とされた時代、自分の信ずるところに従い、最後まで最善を尽くして自己の務めを全うした郷土出身の一司令官のいたことを、私たちはもって誇りにしてよいのではないだろうか。

大本営発表により、初めて守備隊司令官が郷土出身の栗林中将であることを知らされた時、当時の長野県民、とりわけ身近な長野市民にとって驚きとショックは大きく、中将の奮闘を賛え、その死を惜しむ声がしきりであった。時に行年五十四歳の働きざかりであった。

栗林大将は故郷松代町西条の生家に近い、高坂弾正の墓と、蛙合戦で名高い、曹洞宗の古刹龍潭山明徳寺の墓地に葬られていて、時おり東京昭島市に在住の義井未亡人が墓参に訪れている。墓石には戒名國應院殿忠誓自浄大居士が刻まれている。

引用参考文献

- 『太平洋戦争（下）』児島 襄著 中央公論社 昭和四一年
- 『天皇の軍隊』大江志乃夫著 小学館 昭和五七年
- 『海軍学徒兵硫黄島に死す』多田 実著 講談社 昭和五五年
- 『松代―歴史と文化―』信濃毎日新聞社編 昭和六〇年
- 『硫黄島いまだ玉碎せず』上坂冬子著 文芸春秋 平成七年
- 『米國大統領への手紙』平川祐弘著 新潮社 平成八年
- 『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社 昭和二〇年二月、三月
- 『若き日の栗林忠遺』栗林 直著 昭和四〇年

（長野市上松四丁目一八ノ一〇）